

第Ⅱ章 自由論題 第2分科会（人文科学）

4 少数民族文学の近況について

西 脇 隆 夫（都立大学）

新中国になって、サニ部族の「アシマ」やチワン族の「刘三姐」など数多くのすぐれた作品が発掘されたり創造されたために、少数民族の文学は新たに注目を浴びるようになった。

それまで少数民族の人びとは、奴隷制度あるいは封建制度社会のもとでケダモノ視され民族的差別を受けながら、下積みの者として生きてきたが、人民共和国が成立し解放されて新しい社会の主人公となると、かれらはその喜びをさまざまな文芸形式で表現した。それはあたかも地下で眠っていた溶岩が地表へ激しい勢いで噴出するかのように、胸の底にたまっていた思いを一気に爆発させた観がする。

口頭で伝えられてきた神話、伝説、民話、民謡、叙事詩などの伝統文学のみならず、新しい生活に取材した小説や詩歌もたくさん創作されはじめた。これらの作品はいずれも民族的な形式と内容によってそれぞれの民族の特色を鮮やかに示すとともに、現代の中国文学を多様化し豊かにする役割をはたしているともいえよう。(1)

では、少数民族の人びとは今日どのような文学を創造しつつあるのだろうか。67年から70年にかけては、革命的模範劇を除き、少数民族の文学作品は中国の刊行物にほとんど発表されていないが、72年になると「文艺讲话」発表三十周年を記念して各地で文芸作品の募集がおこなわれ、少数民族による創作も少しずつ私たちの眼にふれるようになった。まだ氷山の一角を見るように一部分しか見られないが、文革の渦中においても創作活動が維持され、多くの作品が生み出されてきたことは容易に想像できるのである。

72年には38の民族の詩歌を収めた（中央民族学院編『颂歌声声飞北京—少数民族诗歌选』、人民文学出版社、1972年9月、9400首）が出され、自力更生の精神で厳しい自然とたたかう広西チワン族自治区のヤオ族、チワン族の姿を描いた報告文学集（河池地区革命委员会・都安瑶族自治县革命委员文艺创作组『壮志压倒万重山』广西人民出版社、1972年5月、14篇）が刊行され、1973年にはムーラオ族の著名な詩人包玉堂の詩集『在天河两岸』（广西人民出版社、1973年11月、46首、66,500部）も出版されるようになった。(2) また、各種の新聞や雑誌には詩歌、散文（決意文や革命大批判文など）、舞踊、歌曲などが断片的に発表されている。(3)

これらの書き手で気がつくことは、包玉堂をはじめ長詩「百鸟衣」で知られるチワン族

の詩人 韦麒麟 や『科尔沁草原的人们』で登場したモンゴル族の作家 玛拉沁夫 など既成作家や詩人の健在であるが、(4) なによりも注目すべき点は圧倒的に多い労、農、兵の業余文芸工作者の活躍、抬頭であろう。このことは、文革前には民族学院の学生や各地域、各民族の幹部および重要なポストを占める人びとの中には、旧時代の支配層出身の者、奴隸主や農奴主などが少なくなかったのに対し、60年代後半以降は解放された奴隸、農奴、貧農の中から新たに抜きされた少数民族幹部が圧倒的多数を占めるようになった事実とも一致している。すなわち、党と政府による民族政策の文芸における反映ともいえよう。

文芸創作の方針については、じつは64～66年頃の時点で現在の状況を示す方向がすでに決定されていたと思われる。64年の現代京劇競演大会および音楽舞蹈史詩「東方紅」の上演に引き続いて催されたのが「全国少数民族大众业余艺术竞演大会」なのである。ここでは「革命的思想内容」、「民族的形式」、「業余の特色」が文学、芸術の基準とされている。これらの点が文革期を通していっそう徹底されて今日に至ったのではないだろうか。

理論的な面については、文芸路線の骨幹となる「文艺讲话」の学習が重視され、ウイグル、カザフ、チベット、モンゴル、朝鮮などの各民族語版が大量に出版されてきた。また、創作活動の面では、「革命的な模範劇」が革命文学の典型として示され、『红灯记』や『白毛女』などの普及が少数民族地区でもしばしばおこなわれている。さらにチワン、チベット、ウイグル、朝鮮各族ではこれらの作品をその民族語で上演するようになった。

こうして創作の意欲がかきたてられ、自分たちの民族（あるいは地域）の「模範劇」、革命文芸をつくる方向へ歩みは始めている。その際に創作の担い手となっているのは、各地、各単位の業余文芸宣伝隊であり、民間歌手や業余作家なのである。

たとえば、雲南省徳宏タイ族チンポー族自治州の瑞麗県では、全県に百二十の業余文芸宣伝隊が組織され、タイ、チンポー、バラウン、リス、アーチャン各族の民族文芸として特色をもった詩歌、民謡、民間故事、音楽、舞踊を創作したり普及したりしている。この二、三年来同県党委員会は、指導幹部、民族歌手、鼓手、芸人、業余文芸の積極的な活動家が参加する会議をしばしば開いて、毛沢東革命路線と政策、社会主義思想を宣伝し、資本主義的な傾向を批判するために三大革命運動の中で民族文芸に戦闘的な役割を發揮させたとのことである。

同県の姐勒公社のある生産隊の業余文芸宣伝隊は村史や冢史の材料を集めてタイ劇『不忘阶级苦』や『庆新年』を上演したり、孟秀公社のチンポー族の業余文芸宣伝隊では「タイ族の大寨」と呼ばれる広双生産隊の経験を普及するために「学广双、赞广双」や「改天换地学大寨」などの歌をつくるというように、新しい人と事物を快板、小演唱、民歌などにとりあげて田畑で演じている。

また同省のシーサンパンナ・タイ族自治州では、多数の業余の民間歌手（タイ語で「ザンハ」

という)が登場しはじめ、公社員、はだしの医者、帰郷知識青年や基層幹部たちが、新しいザンハとして、新しい事から——党と毛沢東主席、各民族の団結、辺疆の建設、各民族の協力による医療活動、貧農・下層中農による学校経営などをうたっている。

その中ですぐれた作品として、景洪県のザンハ康朗甩(長詩『傣家人之歌』などで著名)の『我把社会主义祖国歌唱』、勐海県のザンハ康朗英(『流沙河之歌』の作者)の「金色的芒果献给毛主席」と長詩「澜沧江之歌」、景洪県のザンハ波万の「合作医疗好」などが新聞や雑誌に発表されるようになった。⁽⁵⁾自治州の各級党委員会と革命委員会はこれらのザンハの成長に注意し、州、県、公社、大隊で“ザンハの集い”を定期的に催し、その学習を組織したり創作や上演の問題を討論するという。最近の批林批孔運動でも、百以上の歌や台本が創作された。

同様の状況は新疆ウイグル族自治区のイリ・カザフ族自治州にも見出される。この州の業余文芸の戦士たちは、模範劇を手本に「英雄に学び、英雄を書き、英雄をうたう」活動を展開し、当地の「新人新事」、新しい気風を熱情をこめてうたっている。ウイグル族の歌舞劇「歌唱英雄艾山」は伊寧県東風公社のウイグル族公社員、共産党員の居馬が毛沢東思想を活学活用した先進的な経験にもとづいて創作されたものであり、最近上演された「歌唱英雄康力帕」(诗歌演唱)は、カザフ族の女性遊牧民庫力帕が仲間を救うために暴れ馬をおさえて自らの貴い生命を犠牲にしたという実話をもとにしている。

また「阿肯」(カザフ語で民間詩人、民間歌手兼トンプラという楽器の弾き手の意)たちも、旧社会の苦難と今日の幸福を草原で開かれる弾唱会でうたっている。92才になる司馬古勒はアルタイ草原で著名な阿肯であり、新作の「十大胜利闭幕喜人心」をうたって遊牧民たちの共感を得たし、布尔津県の有名なトンプラの弾き手木塔里夫も「日夜想念毛主席」をうたったとのことである⁽⁶⁾

このように業余文芸宣伝隊によって革命模範劇が普及されたり身近な題材が文芸化されるとともに、以前から専門的に文芸に関与してきた民間歌手、詩人、芸人を尊重しながら、新しい業余の歌い手、書き手を多数育成する方針がとられている。現在のところは、大衆が最も喜び表現しやすい形式、民謡、舞踊、語りものなどが多く、文字となったものでも散文(批判や決意を述べた文章を含めて)や報告文などが目立っている。⁽⁷⁾民族によってはその民族文字の伝統が浅かったり漢語は話せても文章は書けない人が少なくないこと、少数民族の人びとは文芸を口頭で伝承する席合いが依然として大きいことによるのであろう。⁽⁸⁾

おそらく今後は(すでに包玉堂の詩集が出されたことでも明かなように)既成の作家や詩人の著作が再刊されながら、新人の業余作家・詩人たちの選集が続々と出されるものと思われる。これは全国的な規模でいえば、浩然や李云德らの作品が再刊されるとともに、いっぽうで業余作家の短篇集、選集がたくさん出されはじめてきたことと同じであろう。⁽⁹⁾

さらに、少数民族文芸の創作理論もいっそう具体化され、深められていくにちがいない。すでに吉林省延边朝鮮族自治州の文工団は、「让朝鲜族歌舞艺术开出新的花朵」(『光明日报』，

1973年4月12日)を発表し、第1に民族形式、民族風格と现实生活、第2に民族文化遺産の継承と発展、第3に各民族の文化芸術における共通性と独自性について論じたのである。「庆丰收」などの創作経験を総括して書かれている点で、私たちの注意をひくものがある。

さて、現在までに私たちが読める少数民族の作品は、どのような特色を示しているのだろうか。題材、形式などについてはこれまでに若干ふれてきたが、その表現手法の点では、チワン族の黄徳玉、韦立斌の詩「壮錦を刺しゅうして北京へ行く」⁽¹⁰⁾の冒頭の一連

剪来天边最红的霞
摘下银河最亮的星
松柏作针虹作线啊
绣幅壮锦上北京

(空から切り取ったもっとも赤い夕映え
銀河からもぎ取ったもっとも明るい星
松の針 虹の糸で
壮錦を刺しゅうして 北京へ行く)

が代表するように、今日の政治路線と政策にそった内容、毛沢東と党の讃歌などが各民族の独自性、特色を生かして表現されているといえよう。

「アシマ」などのような旧社会から伝承文芸は姿を消しているが、新旧の社会を対比させ現在の生活をたたえるときに、それぞれの民族が伝えてきた神話や伝説が比喻としてしばしば用いられている。⁽¹¹⁾

現代の中国に対して、私たちの認識にはまだまだ不十分なところが少なくなく、とくに少数民族については、欧米や日本の学者の中にはあたかも「生きた標本」ととらえるような姿勢が見られた。私たちはこのような興味本位の態度を廃し、常に厳しく自戒しながら研究しなければならない、と感じさせられる。現在の生活に喜びを感じ生産と辺疆の建設に生き生きとして励む現実の姿を通して、厳しい自然とたたかい、支配階級に反抗し、民族的・種族的差別や偏見とたたかってきた少数民族の人びとの生き方、歴史にこそ私たちは学ばなければならない。その文学はいわばあらたまのごときのものであっても、近代文学には見られない強力なバイタリティと生活感をもって私たちに迫ってくる。このような意味でも、今後も少数民族の作品がいっそう多く読めることを期待するものである。

注

(1) 少数民族文学については

集成「绚丽多彩的百花园 — 建国十五年来民间文学作品巡礼」『民间文学』，

1965 年第 5 期

中国科学院文学研究所『十年来的新中国文学』，作家出版社，1963 年

少数民族の歴史，文化および現況は

何润「旧中国で差別されていた少数民族の今日」，『人民中国』1974 年 7 月号

村松一彌『中国の少数民族』，毎日新聞社，1973 年

(2) 包玉堂の詩集は 56 ～ 66 年の作品を収め，最近の作品としては

「老支书」「新党员」『光明日报』，1973 年 7 月 1 日

「风吹橘香十里飘」『红水河畔歌声扬』（广西人民出版社，1973 年）所收

「毛主席到我们广西来」『红水河欢歌』（广西人民出版社，1973 年）所收

(3) 1972 年から 74 年までの各種の刊行物に発表された詩歌の概数は，チワン 12 ，

モンゴル、ウイグル、チベット各 6 ，イチ、ミャオ、チャオ 3 ，ハニ、

ニトン 2 ，オロチョン 2 ，モーラオ、高山、チンボー、トウチャ、リス、

ヌー、ドールン、チャン、シーゴ各 1 。

(4) 玛拉沁夫は『光明日报』（1973 年 1 月 21 日）に「草原骏马——“牧夫大寨”

鸟审召纪事」を発表している。

(5) 康朗英の詩は「赞哈的歌」（征鹏翻译整理）が『光明日报』（1973 年 7 月 1 日）

に発表されている。

(6) この他に内蒙古各地のウランムチ（赤い文芸工作隊の意）の活動が注目され，『珍贵的礼物』（内蒙古人民出版社，1972 年）に「新牧民」など歌舞、語りものが 6 篇収

められている。全国の競演大会上の演目は好評で，1965 年にその紹介書が数種類出されている。

(7) 短篇小说ではブイ族の韦兴儒による「红花」（『前进路上』贵州人民出版社，1972

年，所收）を読むことができるにすぎない。

- (8) 1974年1～6月の新聞紙上には、批林批孔運動における発言として、モンゴル、チベット、ミャオ、チワン、ヤオ、イ、エベンキ、ウイグル、ショオ、ハニ、トウチャ、クーツオン、回、ユーク、オロチョン、サラール各族の労農兵の文章が34篇載せられている。量がしだいに増加している点、内容も家史に相当する点で注目されるが、文芸化された形ではまだ登場していない。これらが1965年に出された『奴隸的新生』（中国青年出版社）のようにまとめられたり、小説や詩歌の題材にとりあげられることになる。
- (9) 文革以降各地で発表された漢民族の作者の文芸作品には少数民族を描いたものが少なく、モンゴル、チベット、チワン、ミャオ、ヤオ、リス、ワ、イ族にふれた短篇小説が20篇以上、チベット、モンゴル、ウイグル、チワン、ミャオ、ハニ、リー、ホジャ各族にふれた散文、報告文は10数篇に達している。
- (10) この詩は前述の『頌歌声声飛北京』および『毛主席に献げる頌歌』（外文出版社，1971年）に収められている。
- (11) たとえば、広西チワン族自治区の謝紀登の詩「阿卡」はイ族の電気労働者を描いているが、この中でイ族の民間伝説で語られる、大力無双で智恵がある勇士阿猛にふれ、この労働者の形象化に用いている。

